〔研究ノート〕

五代から北宋時代前半の塔建造と宝物の奉納について ―古物の納入例―

「大和文華館の中国・朝鮮美術」でお披露目された新規収蔵品の「螺鈿菊唐草文小箱」（高麗時代・14世紀）との関連から中国の螺鈿経箱に目を向けると、現存する早い時期の作例として飛英塔（浙江省湖州市）から発見された「螺鈿仏像花文経箱」（図１）が挙げられます。この経箱を端緒として本稿では、経箱などの仏塔への納入品に、仏塔の建造年代より以前に別の目的で制作されたものが含まれていることに注目し、類例を幾つか提示したいと思います。

飛英塔から発見された経箱は各面毎に分解してしまっていますが、三尊仏や供養菩薩が螺鈿であらわされ、側面板の両端に組手構造と見られる凹凸が認められます。この箱の底板外側に次のような楷書朱書の題記があります（『文物』1994年第２期）。

「呉越国順德王太后呉氏謹拾
［捨］宝」装経函肆只入天台山
広福金文」院転輪経藏永充供養」
時［辛］亥広順元年十月日題記」

呉越国順德王太后呉氏は五代のうち呉越国の最後の国王である銭俶の生母、呉漢月（912－952年）で、辛亥広順元年（951）は呉漢月が亡くなる前年にあたります。この「宝装経函」は呉漢月によって作られ、天台山広福金文院転輪経藏に納められた四箱のうちの一箱であることがわかります。

飛英塔（図２）は太湖の南方に位置しています。木製の塔の中に石製塔が建つ二重構造になっており、内側の塔は唐時代の建造、外側の塔は北宋時代の開宝年間（968－976年）に創建、南宋時代の紹興20年（1150）に落雷で毀れ、内塔が紹興24－25年（1154－1155）に再建、外塔は端平年間（1234－1236）に重修されています。そして、経箱は外側の塔の壁の中に納められていました。この螺鈿箱は制作されて現在の浙江省の中部にある天台山の広福金文院輪転経藏に納められた（広順元年（951）後、恐らく開宝年間（968－976）に現在の湖州市にある飛英塔の外塔建造に際して移され、納めなおされたことになります。その意図は明らかではありませんが、背景を探っていきたいと思います。

経箱が国王の亡き生母が制作させたものであれば、その移動には国王が関与していたことが考えられます。国王の銭俶は多数の僧侶と交流があり、仏教事績を数多く行うなど、信仰が篤かったことで知られています。経箱が制作された951年に銭俶は僧道潜によって菩薩戒を受けており、また飛来峰では最も早い紀年銘を持つ阿弥陀三尊像が彫造されています。銭俶の亡き母に関する事績としては、953年に城北に報恩元教寺を建てて亡き母を祀り（『十国春秋』巻81「夏四月、建報恩元教寺於城北薦王妣也」）、954年に亡き母の銅像２体を鋳造させ、二尼寺に奉納しています（『十国春秋』巻81「夏五月辛巳、王命鋳恭懿太夫人銅容二、致奉国金地二尼寺」）。その他、呉越国の領域内では盛んに造寺造塔が行われ、開宝年間には銭俶と妃の孫氏の発願によって雷峰塔が西湖の南岸に建造されました。太平興国３年（978）に宋に降る呉越国にとって、雷峰塔の建造は最後の一大事業となりました。そのような中で経箱は移されており、銭俶の宗教的事蹟の一環の中で捉える必要があるでしょう。古い仏教文物を改めて別の場所に納めている例は他にも認められます。

図１（部分）

瑞光寺塔（江蘇省蘇州市）の第三層天宮から発見された「螺鈿花鳥文経箱」（図３）は、中国で現在最古の螺鈿経箱の作例として知られています。経箱は印籠蓋造りで、文様は唐時代の鏡文様を彷彿とさせる堂々とした形であらわされています。この経箱内から発見された紺紙金泥『妙法蓮華経』七巻（図４）は、題記によると、数回に渡って補修が施されています。

第二巻巻末墨書題記
「大和辛卯四月二十八日修補記」
（本中の解説文より）
第七巻巻末金泥書題記
「時顕德三年歳次丙辰十二月
十五日弟子朱　承恵特捨浄財
収贖此古舊損経七巻備金銀及
碧紙請人書写已得句義周圓添
続良因伏願上報四重恩下救三
塗苦法界含生俱沾利楽永充
供養」
（掲載写真より筆者書き起こし）

これらによると、経箱内に納められていた経巻は「大和辛卯」（呉・931年）に補修され、さらに、顕德三年（後周・956年）に古い破損した経七巻が買い求められ、再び金銀及び「碧紙」を用いて補修されているようです。瑞光寺塔の建造は発見された文物から、北宋の景德元年（1004）から天聖八年（1030）とされることから、経巻の補修後さらに約50年後に塔に納められたことになります。経巻の後補がどの程度であったか、経箱がいつの段階で制作されたものかなどの詳細は不明ですが、わざわざ古い経巻を求めて補修することに意味があったと考えられます。奉納品には、瑞光寺塔に近い蘇州市長洲県通賢郷の人物名が刻まれた金銅製の宝篋印塔（阿育王塔、「乙卯（955年）」刻銘）とともに、よく似た形状の銅製塔が含まれています。様々な材質の阿育王塔が五代から宋時代にかけて江南地方を中心に盛んに造られた際には、形を写す（模造）ことが重要視されたと考えられますが、この場合は古物を納める行為としても注目できます。

その他、北宋の崇寧三年（1104）に塔を造る磚を焼造し始め、政和五年（1115）に竣工した白象塔（浙江省温州市）では、建造年間に製造された銅銭や経巻の他に、熙寧四年（1071）銘の三稜形磚や至道二年（996）銘の塑像が塔より発見された宝物の中に認められます。

仏塔へ古物を納入する行為として、別の寺院や塔に納められていたものが移される場合や古物を買い求めて納める例が認められました。各々その具体的な背景は異なるようですが、国王が関わっていると考えられることや、金銀等の材料を用意し、人を雇って書写補修させていることを考慮すると、単に高価な宝物を使い回しているのではないことは明らかで、古物の奉納に特別な意図があったことがうかがえます。

（図１は『世界美術大全集・東洋編』第５巻、小学館、1998年12月より、図3、4は『蘇州博物館蔵　虎丘雲岩寺塔、瑞光寺塔文物』蘇州博物館、2006年10月より転載させていただきました。

学芸部部員　瀧朝子）

図２

図３

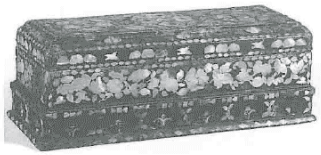

図４

季刊 美のたより No.174
平成23年4月6日
発行　大和文華館

Copyright ©2011 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.